

Chopstick case of Leaning Tower of Pisa

箸自体は中国から伝承した文化ですが、木製の割り箸とは、山の多い日本の風土で生まれたものです。

その木製の箸を紙や布で包むというのは、ささやかでありながらも日本人のおもてなしの心を反映した、大変日本らしい文化だと思います。また食卓というシーンは、だんらんや交流という側面も持ち合わせており、このシーンを活用したいと考えました。

そのような思いから、ピサ・ロマネスクの文化とおもてなしの文化の融合させた、この斜塔の箸袋を制作しました。

この箸袋ですが、ご覧の通り、ピサの斜塔の特徴的な外観である白い外壁、8層のアーチという要素を取り入れています。

ピサの斜塔は、今日日本に暮らす者で知らぬ人間はいないのでは、と思われるほどにたいへん有名な建築物です。

そのため、ピサ・ロマネスクの文化への取っかかりとして、最も適したモチーフだと考え、今回斜塔をメインモチーフに選びました。

また、ロマネスクの要素の詳細をすべて取り入れるのではなく、あえて少ない要素に絞ってデザインにすることにより、特徴が伝わりやすいよう工夫しています。



制作技法ですが、乳白色のペーパーを使用したペーパークラフトの技法を用いて作成しました。

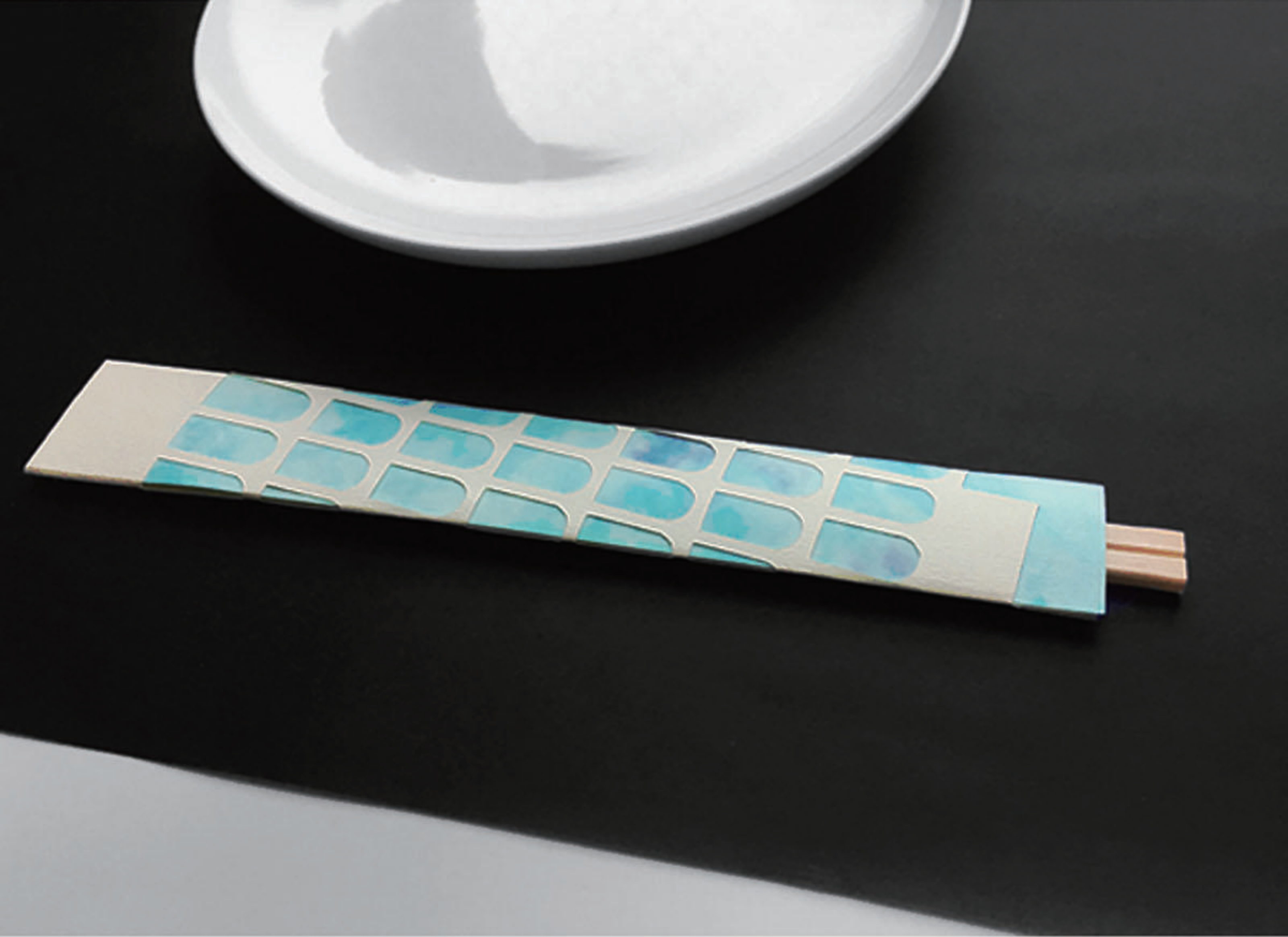
まず、アーチの美しさが伝わりやすいように、一定の規則性を持たせ、且つ、割り箸がきちんと収まるような図案を乳白色の紙に書き起こしました。そして、その図案をひとつひとつカッターナイフで切り抜く、切り絵のような手法を用いて完成させました。

切り絵的アプローチを選んだのは、アーチの内部に影が落ちることで、自然な厚みができると思ったからです。

また、この箸袋の中に使用した、ふわりとした風合いの水色の紙は、彩雲“sai un”という特殊紙を使用しています。

ピサについて書籍やウェブサイト調べたのですが、イタリアのトスカーナ地方の青い空が、白い斜塔の美しさをより引き出しているように感じました。なんとかしてその両方の美しさを表現したいと考えた結果、今回こちらの特殊紙を選び、挟み込みました。

テーブルにおいた際にも、ユニークさと共に、華やかさをも添えることができることもポイントとなっています。



Pisan Romanesque meets 'Haashibukuro'

